

家庭の防災意識向上を目指した子どもへの防災教育の実践的研究

福知山公立大学地域経営学部谷口ゼミちょっと防災プロジェクト

○吉森 萌生 (Yoshimori Mei)・木下 大生 (Kinoshita Daiki)・田藤 愛梨 (Tafuji Airi)・山崎 楓真 (Yamazaki Fuma)
(福知山公立大学地域経営学部地域経営学科)

キーワード：防災教育、災害、家庭

1. はじめに

近年、日本は地震や豪雨をはじめとした自然災害が多発している。そのため、災害が起きる前からの防災の取り組みが重要視されている。しかし、実際に災害に備えている人が少ないという現状にある。そこで、私たちは子どもや親子を対象にした防災に関わるワークショップを企画し、実施した。本論文では、家庭の絆に着目し、子どもが家庭の架け橋となり、家庭の防災意識の向上に繋がると考察する。

2. 現状

こくみん共済 coop の「防災・災害に関する全国都道府県別意識調査 2024」によると、全体の 74.4%が災害に不安を感じている。しかし、現在、在宅時の災害に対して備えができると回答したのはわずか 26.6%であり、どちらともいえない、できていないと回答した割合は全体の約 4 分の 1 を占める結果となっている。このことから、多くの人が災害に対する不安はあるものの、普段から災害を意識した防災の取り組みを行っている人は少ないという現状がうかがえる。

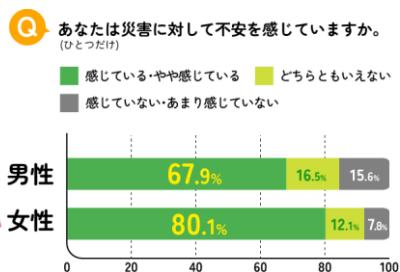


図 1 災害に対する不安を感じる人の割合

出典：防災・災害に関する全国都道府県別意識調査



図 2 在宅時の災害に対する備え

出典：防災・災害に関する全国都道府県別意識調査

また、災害に対する備えを意識するタイミングは、災害発生の報道を見た時と回答した人が 41% であり、普段から災害を自分事として捉えている人は少ないことが分かる。

この調査から、災害に対する不安と防災の取り組みには大きなギャップがあり、その要因のひとつとして、災害を自分に関わることとして捉えられていないことが挙げられる。

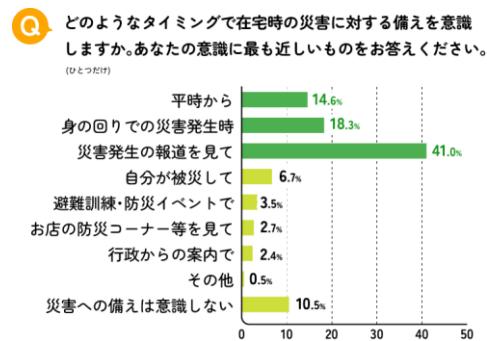


図 3 災害に対する備えを意識するタイミング

出典：防災・災害に関する全国都道府県別意識調査

そこで、福知山市の子育て支援拠点「りとる ハピネス」で独自に聞き取り調査を行ったところ、家庭で防災の取り組みはできていないが、家族のためなら積極的に取り組みたいという声が多く聞かれた。このことから、子どもに架け橋となってもらい、家族の繋がりによって災害を自分事として捉えるようになり、家庭の防災意識を向上させられると考える。

3. 実践研究

私たちは、学校以外の場所での子どもの防災教育を考え、気軽に防災について考えられるワークショップを行った。学校の避難訓練とは違い、自分で防災について考え、身をもって体験でき、楽しく防災について学べる機会を提供した。

3.1 防災おかしポシェットづくりワークショップ

このワークショップは福知山ワンドーマーケットや、一般社団法人京都ソーシャルビジネス・ネットワーク主催の「初めての PBL(課題解決型学

習)」にて複数回開催した。ここでは災害時に持ち出す避難グッズを家族で準備するきっかけになることと、子どもに防災について興味を持ってもらい、楽しく学んでもらうこと目的に行った。最初に簡単な防災クイズを実施し、災害時に必要な物を用意し、子ども自身になぜ必要なのか、どのように使うのか考えてもらい、自分で必要な物を選別しポシェットに入れてもらった。防災グッズの中にはお菓子も用意し、防災のお菓子の重要性を伝えた。



図4 防災おかしポシェット

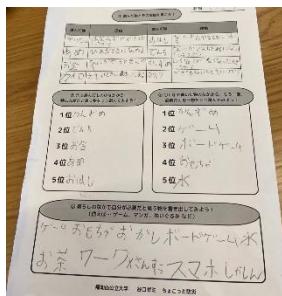


図5 ワークシート

3.2 新聞紙スリッパづくりワークショップ

新聞紙スリッパづくりは福知山ワンドーマーケットで開催し、子どもが身をもって体験できることや、家族と防災について考えるきっかけの提供を目的に行った。子どもが新聞紙スリッパを作り、家屋の被害として予測される窓ガラスの破片に見立てたビーズの上を実際に歩いてもらい、スリッパを履いた時と履かなかったときの違いを実感してもらった。また、家でも家族と一緒に作れるように、新聞紙スリッパの作り方を配布した。



図6 新聞紙スリッパ体験ゾーンの様子

4. 結果・考察

防災ポシェットづくりワークショップでは、友人と参加した子どもたちが、自分なりに選んだ防災グッズが違うことに気づき、なぜそれがいるのか説明しあっている姿が見られた。また、一般的に災害時に必要とされている物以外にも、避難場

所で心を落ち着かせられる物を子どもと考えると、ゲームやぬいぐるみ、写真など改めて人によって大事なものが異なることが分かった。しかし、防災とお菓子の繋がりをうまく伝えられなかったことがあった。

新聞紙スリッパづくりワークショップでは、作り方の紙を持ち帰れることで、家族と一緒に帰宅後に作ろうという声が聞かれた。また、ワークショップに参加した親子は、体験エリアでスリッパの重要性に気づき、楽しく防災について知ることができていた。

これらのワークショップから、お絵描きや工作など、子どもの好きなものを通して、防災に興味を持つてもらうことが可能なことが分かった。怖い、難しいという子どもの防災に対するイメージを取り除き、気軽に防災を学ぶことが可能になる。しかし、お菓子や好きなことに夢中になる子どもも多く、防災を学ぶ時間とのバランスが重要だと分かった。また、家でもやってみたいと思ってもらったり、家族にも伝えたくなったりするような工夫が必要である。

5. おわりに

私たちはこれまで、子どもへの防災教育が、家庭の防災意識の向上に繋がると考察し、さまざまなワークショップの実践を行ってきた。日本は地震や水害など、災害が起こりやすい国である。そのため、普段からの災害に対する備えが重要視されているが、実際に具体的な防災の取り組みに繋がっている人は少ない。具体的な行動を起こすきっかけとして、家族の中での防災に関わる会話が必要である。家族や大切な人を守るための防災だと考えることで、防災を自分事として捉えることができ、家庭の防災意識を向上させられる。これまで上記のようなワークショップを行ってきたが、実際に家庭でも防災の話をし、具体的な行動に繋がっているのか調査が必要である。

参考文献

(1) こくみん共済〈全労災〉(2024)「防災・災害に関する全国都道府県別意識調査」

<https://www.zenrosai.coop/bousai-gensai/survey2024.html>

(最終閲覧日：2025年10月20日)